DOI https://DOI.org/10.21481/jbunka..81.201905.477.

異文化理解教材としての『全一道人』小考*

―韓語通詞養成用教材としてのその適性―

金子 祐樹*
(e-mail : kanekoyuukioffice@gmail.com)

<目 次>

1.はじめに
2. 研究史と研究の方法・目的
2.1. 『全一道人』研究史
2.2. 研究目的と研究方法
3. 「其心をやしな」うことと二つの「孝」
3.1. 「其心をやしな」うことと『全一道人』の教育観
3.2. 芳洲の眼前にある二つの孝
4. 韓語通詞養成用教材としての『全一道人』の適性
4.1.『全一道人』『勧懲故事』と行実図系教化書
4.2.韓語通詞養成用教材としての適性
5. おわりに

キーワード：雨森芳洲(AMENOMORI, Hoshu), 全一道人(*"Zen-itsu Dojin"*), 異文化理解(cross-cultural understanding), 韓国語教科書(Korean Language Textbook), 韓語通詞(Officers for Korean-Japanese Translation)

1. はじめに

日本において韓国語学習者数が増加しているとの報告がある[1)]。日本国内で多種多様な韓国語教科書[2)]が購入できる現在の状況は、その反映と言えるだろう。これらがいずれも

---

* 本論文は、2018年度南ソウル大学校学術研究費助成による研究成果である。
(이 논문은 2018년도 남서울대학교 학술연구비 지원에 의해 연구되었음.)
** 南ソウル大学校, 助教授。日韓翻訳文化論, 日韓都市文化論, 韓国古典文学・思想史。
1) 朴珍奇(2017)「日本における韓国語教育に関する研究-大学の韓国語学習者調査に見る現状と課題」『岡山県立大学教育研究紀要』第1巻1号, 岡山県立大学大学教育開発センター, p.21.
2) 本稿では、教科書・教訓書・勧善書・教化書といった、書物の性質に関する語彙が4種類表れる。そこで、混乱を避けるため、辞書等での定義を参照しつつ以下のとおり区別した。
・教科書: 教育機関等で知識を伝授するための主要な書物教材。抑揚は、きょ「うか」しょ(中高型)。
・教訓書: 教訓、つまり何らかの教えを内容とする読み物。抑揚は、きょ「うくんしょ(平板式)。

www.kci.go.kr

著者の方々の腐心なさった成果であることは、言うまでもない。

さて、日本で上述のような腐心がなされていたのは、現代においてばかりでなかった。周知のとおり、対馬藩は江戸時代における朝鮮外交の日本側窓口としての役割を果たしていた。両国の外交を陰に陽に支えていたのが、韓語通詞である3)。その苦労の一端を、雨森芳洲4)の『交隣提醒』によって確認することができる。

> (1)いったい、朝鮮通信使を筆頭たる三使つまり正使・副使・従事官には「どんなときも対馬藩の抑制を受けてはならない」という勝手な考えがあるようなので、これまで抑制などしたことはなく、日本と朝鮮は文化・風習が異なるため朝鮮のやり方では日本人に受け入れられないということを両国の関係のためにぜひ御理解頂くことから、お聞き入れ頂く。古人の言葉にも『使いは俗に従い礼は宜しきに従う』5)とあり、朝鮮国の体面に関わることは特にそうである。それ以外については、申し上げたことがどうしてそうなのかをよくよくお含みおき下さるよう、お聞き入れ頂かなければならないのである6)。

芳洲は通信使一行に2度随行したことがあるけれども、そのうちのどちらのことなのか、または両方の随行から得た知見なのかは明瞭でない7)。しかし、朝鮮通信使を率いる正使・副使・従事官8)は同時に高位の文官でもあるので、儒教の様式に則って行動していたであろうし、また朱子学を国政の基本理念とする朝鮮の国使としての矜持や自負があったことだろう。したがって、芳洲が上で述べたような、対馬からの抑制は受けないという考えを持っ

・勧善書: 善行とされる行動の実践を勧めるための書物。抑揚は、か「んぜんしょ(平板式)。
・教化書: 特定の教義等で読者を教化する目的で作られた媒体書。抑揚は、きょ「うかしょ(平板式)。

3) 朝鮮王朝側の訳官ももちろん同様である。ただ、論旨の関係上、この注で付記するにとどめた。

4) 1668(寛文08/顕宗09)年に生まれ、1755(宝暦05/英祖31)年に死去。1693(元禄06/粛宗09)年に対馬藩朝鮮方佐役就任。1702(元禄15/粛宗28)年には釜山に初めて上陸し、1703(元禄16/粛宗29)年には倭館に滞在して韓語を学んだ。62歳であった1729(享保14/英祖05)年に『全一道人』を完成させる。

5) 『禮記』よりの引用。正確には『禮記』「曲禮上」篇にあるように「禮從宜, 使從俗」。

6) 「惣体三使の心入れ、いつとても御国より抑制をうけ申すまじきとの我意これある様に相見え候故、曾て抑制にてはこれなく、日本と朝鮮とは風義の違いこれあり、朝鮮の思し召しにては日本向きに会い申さず、何とぞ両国の間宜しき様にと思し召し候所より仰せ入れられる事に候。古人の言葉にも、使いは俗に従い禮は宜しきに従うと申し候間、朝鮮の国体にあずかり候義は各別に候。その外は申し入れ候趣を得と御聞き通され候様にと、御丁寧に仰せ入れられるべき事に候」、田代和生校注(2014)『交隣提醒』[平凡社東洋文庫852]、平凡社、p88. なお、ルビや注釈は省略した。以下同じ。

7) 芳洲は、1711(正徳01/粛宗37)年と1719(享保04/粛宗45)年の2度、通信使に随行している。いずれも新将軍襲職祝賀の為のもので、前者は6代将軍徳川家宣、後者は8代将軍徳川吉宗のそれであった。姜在彦訳注(1974)『海游録-朝鮮通信使の日本紀行』[平凡社東洋文庫252]、平凡社、p.331を参照。

8) 正使は正三品堂上、副使は正三品堂下、従事官は正五品。

www.kci.go.kr

ていたことは十分に考えられる。朝鮮国[9]の高官たちの振る舞いと通信使行の各場面で接する日本人との間で対応に苦しむ韓語通詞の姿が容易に思い浮かぶ。

こうした状況は、何も近世の日韓に限定されたものではない。現代の日韓の間で見られる身近な例としては、食事の際に食器を持つのか持たないのか、謝罪の際に自身の事情を十分に説明することが礼儀となるか言い訳と評されるか[10]、といったことが挙げられる。また、日韓に限定せずとも、海外旅行・滞在先の文化を無視した行動をする外国人は残念ながらどこにでも存在する。つまり、芳洲が『交隣提醒』に書き留めたことは、昔から変わらぬ懸案事項なのであった。そして同時に、通訳として働く限り、誰でも直面しうる事態なのでもある。このような普遍的ともいえる異文化交流上の問題に対し、芳洲は一つの解決策を見出していたように思われる。それが「其心をやしな」[11]うことであった。その著『全一道人』の凡例の一節である。後章で詳述するように、芳洲は同書を含む4種の韓国語教科書を用いることで、ただ言語だけに長けるのではなく、隣国文化理解にも優れた通詞を育成しようとしていた。韓語・韓文化を熟知し深い理解力を持つ通詞の必要性を認識していたのである。そして、そのために着目したのが儒教道徳であり、明の儒教道徳教訓書を底本として彼の作った韓語通詞養成用教科書が『全一道人』なのである。

しかし、儒教を国教的地位に置く朝鮮国の文化とはいえ、明で作られ読まれていた儒教道徳教訓書を韓語通詞養成用教科書の底本にするというのは、果たして妥当なのだろうか。本稿ではこの問題意識に立脚して『全一道人』を検証し、最後に瞥見を示したい。

2. 研究史と研究の目的・方法

2.1. 『全一道人』研究史

検証に先立ち、まずは『全一道人』の研究に関する動向を確認する[12]。大略すれ

9) 本稿では、朝鮮王朝を政権の名称とし、その政権の治める国を朝鮮国とする。また、朝鮮王朝の存否に関わらず韓半島に普遍的に見られるものについては「韓(国)〇〇」として区別した。

10) 持田祐美子(2015)「日本人観光客の口コミから見る日韓謝罪文化の比較-ミスに対して「謝罪がなかった」事例から」、『日本言語文化』33、pp31-45による。

11) 安田章(1964)『全一道人の研究』、京都大学国文学会、p78. なお、同書では頁番号が、冒頭とそれに続く「全一道人の研究」は漢数字、原著翻刻・『勧懲故事』影印・『全一道人』影印はそれぞれアラビア数字で記される。

12) 本章執筆に際しては、金子祐樹(2018b)「雨森芳洲『全一道人』に関する一考察—江戸時代の日本人に向けた異文化理解教材としての内容検証：「孝」を基軸に—」『韓国日本文化学会第55回国際学術大会発

www.kci.go.kr

ば、安田(1964)以前・以後に分かれると考えて良い。そこで、以下では前半を安田(1964)によって確認し、その後の動向を遠藤他(2009)に従って追いつつ、金子(2018)で触れた部分を詳細に紹介したい。

『全一道人』について早期にされた言及は、小倉進平(1940)『増訂朝鮮語学史』によってであった。今、我々はこれを同書の補注版である小倉・河野(1964)やその復刻版で確認することができる。ただ、そこではわずかに触れられたのみで、「其心をやしな」うとあることから『全一道人』の典拠を行実図系教化書にあるとした13)。この説は神田(1949)によって覆され、その書題から明の万暦時代の劇作家である汪廷訥のまとめた『人鏡陽秋』『勧懲故事』と関連するという指摘も受けている14)。その後、安田(1964)が刊行される。同書は、現存する唯一の『全一道人』の研究書である。その中で「『全一道人』が『勧懲故事』のみにその典拠を仰ぐ」15)とし、神田説を是とした。これにより、『全一道人』の典拠問題は終止符を打たれたと見て良い。この二つこそ、安田(1964)を以て本稿が『全一道人』研究史を前後で区切る所以である。

安田(1964)以降、2019年3月末日時点でおよそ55年の歳月が過ぎた。その間に、まだまだ量は少ないと言え、或る程度の進展はあったと見られる。後続研究は日本だけでなく韓国でも出されるようになった。日本では信原修(1980)「雨森芳洲―その『全一道人』をめぐる覚え書」が、韓国では、宋敏(1986)『前期朝鮮近代国語音韻論研究』によって大きく取り扱われたのを皮切りに、『全一道人』を用いた研究と『全一道人』そのものを考察対象とした研究が増えていく。ここでは、『全一道人』という文献それ自体がどのようなアプローチで研究されてきたかをたどるという目的から、後者を整理したい16)。

表論文集』韓国日本文化学会、脚注2で触れたことを土台としつつ、安田章(1964)『全一道人の研究』、京都大学国文学会、pp.三~四と遠藤光曉・伊藤英人・鄭丞恵・竹越孝・更科慎一・朴真完・曲曉雲編(2009)『訳学書文献目録』、도서출판 박문사、pp.231-232を参照した。

13)「「全一道人」は「其心を養ふ」とあるにても知られる如く、忠臣・孝子・節婦等に関する佳話を集めた朝鮮書「三綱行実」或は「五倫行実」などの朝鮮文に日本文の対訳を附したもので、中には朝鮮語の発音・語法に関する周到な注意をも附言して居る。」、小倉進平著・河野六郎補注(1964)『増訂補注朝鮮語学史』、刀江書店、p.59。以下、同書については単に小倉(1964)とする。

14) 神田喜一郎(1949)「朝鮮と雨森芳洲」、『世界人』1巻7号、世界人社、p.52.

15) 安田(1964)、p.9.

16) 選定基準には、内容はいうまでもないけれども、それ以外の基準として論文の主題名または副題に『全一道人』と明記されていることを加えた。その意味でいうと宋敏(1986)は基準を満たさないことになるものの、遠藤他(2009)、p.231で取り上げられ、また安田(1988)、p.180で指摘されているように『全一道人』研究史への影響が大きいことから、本文に挙げた。また、同様の観点から書評は含めない。学位論文は含めた。また、ここで挙げた先行研究の書誌情報全体は参考文献に挙げたので本文では著者名、刊行・受理年、論文タイトルのみを示すにとどめる。

www.kci.go.kr

2010年代前半までの『全一道人』研究は、全体的な傾向として『全一道人』の持つ言語学的特徴の一つについて考察するものが多い。安田章(1994)「全一道人再見」、閔丙燦(1996)「『全一道人』の三濁点について」、高橋誠司(1999)「『全一道人』의 仮名転写 研究」、閔丙燦(2003)「『全一道人』에 있어서의 「-ㅐ」의 仮名転写에 대한 考察」、車胤汀(2004)「근대 조선어 학습서에 나타난 오류 표현과 원인 분석 -『전일도인(全一道人)』, 『강화(講話)』, 『표민대화(漂民対話)』를 중심으로-」、同(2007)「조선어 학습서에 나타난 한국어의 변화 - 『全一道人』, 『講話』, 『漂民対話』를 중심으로」、李在鏞(2012)「18世紀日本の韓国語学習書における「ツ」の表記―雨森芳洲の『全一道人』を中心として」、といった具合である。こうした傾向から脱して『全一道人』に表記されたカナ書き韓国語全体に着目して安田章(1964)以来のハングル復元を成したのが許仁寧(2014)「全一道人의 한국어 복원과 음운론적 연구」であった。この成果の一部は同(2015)「『전일도인(全一道人)』가나 전사의 교정에 대하여」としてまとめられたものの、復元ハングル版本文は未だ学位論文内に留まっており、一刻も早い刊行が望まれる。

そして、2010年代後半に入って『全一道人』研究は新たな段階を迎えたといって良い。即ち、翻訳研究と域外漢籍[17]研究からのアプローチである。まず、これはまだプロシーディングにとどまるものの、許仁寧(2017)「아메노모리 호슈(雨森芳洲)의 『전일도인(全一道人)』 번역에 대하여」が発表された。同年、台湾では林桂如(2017)「汪廷訥《勧懲故事》之成書及其東伝影響之研究」が刊行されている。いずれも新しいアプローチであり、今後の展開が期待される。最後に拙稿ながら、金子祐樹(2016)「『全一道人』孝部と『五倫行実図』の諺解文比較と雨森芳洲の韓語日訳―行実図系教化書との比較による『全一道人』の翻訳学的研究(2)―」、同(2017)「『全一道人』孝部と英祖改訳『三綱行実図』の諺解文比較と雨森芳洲の韓語日訳―行実図系教化書との比較による『全一道人』の翻訳研究：18世紀前半の諺解文との比較(2)―」、同(2018)「雨森芳洲の見た通詞と朝鮮国―『たはれくさ』と『交隣提醒』から一考した『全一道人』編纂の動機と意図―」がある。これらは『全一道人』に記載される言語の研究だけでなく、そもそもなぜ芳洲が『勧懲故事』という明の儒教道徳教訓書を韓国語通詞養成用教科書の底本にしたのかという、いわばその存在理由を問う研究も含まれる。許・林両氏の研究にまたがるアプローチとも言える。

17) 域外漢籍とは、いわゆる中国大陸外、即ち日本列島・韓半島・ベトナムといった地域で独自に漢文で書かれた当地の漢籍か、または同地域で筆写等された中國漢籍を指す謂いである。

www.kci.go.kr

以上を総括すれば次のとおり。すなわち、小倉(1940)より始まった草創期の研究が安田(1964)により一つの結実を見せる。その後、言語学的研究が主流だった時期を経て、2010年代後半は翻訳研究・域外漢籍研究など多様なアプローチがされているのである。

2.2. 研究目的と研究方法

上述の流れを踏まえると、本稿の内容は域外漢籍研究に近い。中国の立場で見ると「域外」つまり国外へ出た漢籍の研究なのであろうが、日本からすれば漢籍受容研究である。雨森芳洲は明の儒教道徳教訓書である『勧懲故事』を受容したのであり、その目的は韓語通詞養成用教科書の底本として用いるためであった。したがって、芳洲にとっては『勧懲故事』の内容が韓語通詞を養成するのに相応しいものだったということになる。しかし、韓語通詞が対応すべきは朝鮮通信使を代表とした朝鮮国の人々であり、明や清の人々ではない。仮に儒教道徳教訓書を底本にするとしても、朝鮮国には『三綱行実図』を始めとする行実図系教化書18)という一連の官撰教化書が存在する。とくに成宗刪定版『三綱行実図』は、芳洲の在世時に存在したというだけでなく、浅井了意による和刻本や和訳本として日本で広く読まれた書物でもある。朝鮮国で広く普及し且つ日本でもよく知られた『三綱行実図』を避け、わざわざ明の教訓書を底本にして韓語通詞養成用教科書を作ったのはなぜだろうか。これについて芳洲は『全一道人』凡例で次のように述べる。

> (2)対馬の人でおよそ公務に携わる者なら、韓語学習を考えない者がいようか。しかし教科書も教育方法も無ければ、非力を嘆くばかりである。そこで4部の本を選んだ。初めに『韻略諺文』を読んで韓国語の字訓を知り、次に『酬酢雅言』を読んで韓国語の短文を知り、その次に『全一道人』を読んで「其心をやしな」い、それから『醍屢衣椀』を読んで公務を果たさせる。このような教育カリキュラムを作ることで人材を育て上げやすくなるのを願う。芳洲書19)

18) 行実図系教化書とは、朝鮮王朝第4代国王の世宗が1400年代前半に刊行した『三綱行実図』(以下、世宗版『三綱』)を皮切りに、朝鮮時代を通して長らく刊行された儒教道徳教訓書のシリーズである。世宗版『三綱行実図』のほか、成宗刪定版『三綱行実図』・中宗版『続三綱行実図』・『二倫行実図』・宣祖増補版『続三綱行実図』・光海君『東国新続三綱行実図』・正祖『五倫行実図』の7つが存在する。三綱(忠・孝・烈)や二倫(序・信)、またこれらを合わせた五倫(忠・孝・烈・序・信)をテーマとした徳行を人物伝の形式で著している。基本構成は、人物伝の内容を描いた絵図と、漢文で書かれた人物伝の本文の二要素であり、世宗版『三綱』以外には本文の韓国語訳文である諺解文が加わる。行実図系教化書の展開については、金子祐樹(2009)「행실도계(行實圖系) 교화서(敎化書)의 전개와 충행위(忠行爲)의 추이 - 17세기 초기의 관찬(官撰) 교화서 『동국신속삼강행실도(東國新續三綱行實圖)』의 분석을 통해 -」、高麗大学校民族文化研究院、pp.525-578を参照。

www.kci.go.kr

芳洲は韓語通詞を養成するためのカリキュラムを構想しており、そのための教科書が4種あった[20]。この構想から、『全一道人』が「其心をやしな」うために作られたものだということがわかる。ただ、そうであれば尚更、韓語・韓文化やこれらを生み出した朝鮮国の人々そのものを理解できる通詞の心を育むための教科書として明の教訓書を用いた点には不合理を感じざるを得ない[21]。朝鮮国やその文化の理解に一定の限界があった[22]とはいえ、芳洲は『朝鮮事情等雑録』や『朝鮮風俗考』を執筆するほど朝鮮国とその文化をよく知る人物だからである。芳洲なりに見出された韓語通詞養成用教科書として何らかの適性があったからこそ『勧懲故事』を底本としたのではないかと考えられる。

そこで本稿では、韓語通詞養成用教科書として『全一道人』が妥当だったかどうかではなく、同書のどのような部分に適性が見出されたのかという観点から検証する。順序としては、(1)「其心をやしな」うことの具体的な意味、(2)同書の総体としての内容、の二つについて検証を行う。そして、最後に瞥見を加えた。

3. 「其心をやしな」うことと「二つの孝」

芳洲は、自身の構想した韓語通詞養成カリキュラムの中に、「其心をやしな」うことを含めた。そこで自ら著したのが『全一道人』である。このことは同書の凡例で言われているので、韓語通詞には修養された「其心」が必要だと考えていたのは間違いない。そこで本章では、芳洲が何を教えようとしていたのかについて検証することで、「其心をやしな」うが何を意味するのか考察したい。

---

19) 「我州の人　およそ公事に役するもの　たれか韓語に　志なからん　しかし其書もなく　また其教もなければ　たゝに望洋の嘆をいたけるのみ　ここに四部の書をゑらひ　はしめに韻略諺文をよみて字訓をしり　次に酬酢雅言をよみて短語をしり　次に全一道人をよみて其心をやしなひ　次に醍屢衣椀をよみて其用を達せしむ　こゐねかわくは其教の次第ありて　其材をなすにちかからんと　しかゆふ　芳洲書」、安田(1964)、p七八。

20) ただし、現存するのは『全一道人』のみ。

21) 小倉(1964)をして『全一道人』を「「三綱行実」或は「五倫行実」などの朝鮮文に日本文の対訳を附したもの」(p.59)と言わしめた一因であろう。

22) 芳洲には、朝鮮国や韓文化について儒学を通してのみ理解し、またさせようとする限界があった。金子祐樹(2018a)「雨森芳洲の見た通詞と朝鮮国―『たはれくさ』と『交隣提醒』から一考した『全一道人』編纂の動機と意図―」、『2018異文化交流国際学術研討会論文集』、南栄科技大学生活応用学院、pp.44-55を参照。

www.kci.go.kr

3.1. 「其心をやしな」うことと『全一道人』の教育観

まずは、「其心をやしな」うという文言について、その意味を確認しておきたい。

原文にある「やしなひ」の基本形である「やしなふ」については、現代語と変わらない意味の「はぐくみ育てる」、より正確に言えば、心を「やしなふ」ので「修養」と解釈して良かろう。明のものとはいえ教訓書を用いていることからもそれは窺える。

では、修養される「其心」とはいったい何か。同じく当時の教訓書である常盤貞尚23)の『百姓分量記』「性気の解」でも「其霊明を性といふ。性動く時は心となる」24)と言及されている。修養されるべきものを冒頭に挙げた他例として興味深い。

こうした、当時の教訓書で教化されるべき「其心」「心」について、現代語と同様に「肉体に対する意味での精神」と解釈すれば、「其心をやしな」うとは文字どおり精神修養を指すことになろう。また、芳洲自身が朱子学系の儒者である点を考えれば、朱子学的に解釈することも可能である。『大学章句』では「欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意」という文言に対し、「心者、身之所主也。誠、実也」と注釈される。『交隣提醒』に「誠信と申し候は実意と申す事」25)とあり、『大学章句』の「誠、実也」に対応することを踏まえると、芳洲の「其心」は「心者、身之所主也」の「心」と理解して良かろう。この文言を『北渓字義』26)によって解釈すれば、すなわち「其心」とは「一身の主宰者」27)である。更に、『大学章句』で「知至者、吾心之所知無不尽也。知既尽、則意可得而実矣。意既実、則心可得而正矣。」とする注釈を頼りにすれば、芳洲は『全一道人』を用いて儒教道徳を熟知させることで、身を正された、誠信外交にふさわしい韓語通詞を養成しようとしていたとする推測が成り立つ。

無論、同書が韓国語教科書であり、なおかつ通詞養成カリキュラムの一つの段階を成している以上、韓国語運用能力の涵養が目的に含まれないわけはない。序文末尾で芳洲自身が、同書を用いた学習方法として「また、どう書いても同様だということがある。〔こういうことは〕詳しく韓人に学び、広く尋ねてようやく理解できることである。例えば『全一道人』について、まず日本語文を熟読してしっかり覚えた後、更にハングルで書かれている■

23) 常盤貞尚。字は潭北。1677(延宝05/粛宗03)年出生、1744(寛保04・延享01/英祖21)年死去。俳人・心学者。『百姓分量記』の他にも『野総茗話』や『民家童蒙解』など農民向けの教訓書を執筆した。

24) 中村幸彦校注(1975)『百姓分量記』、p.246. 本稿では同(1996)『近世町人思想』〔日本思想大系新装版〕、岩波書店を使用した。

25) 田代校注(2014)、p.186.

26) 朱子の高弟に当たる陳淳に著された、いわば朱子学字典。本稿では佐藤仁訳(1996)『朱子学の基礎用語 -北渓字義訳解』〔研文選書64〕、研文出版を使用した。

27) 佐藤訳(1996)、p.73.

www.kci.go.kr

■(欠字)で詳しく韓人に習うべきで、そうでないと真の韓語〔を使えるよう〕にならない」[28]と提示していることからも、理解できる。しかし、芳洲が養成しようとしていた韓語通詞とは、こうした韓語運用能力のみに長けた人材ではなかった。それどころか芳洲は、通詞に必要な能力が言語のみであると誤解している当時の風潮に対して痛烈に批判し、学問と才智に優れた人材を通詞に取り立てるよう進言しているのである。

(3)朝鮮国で務めている御役人として、倭館館守、外交交渉を担う裁判、貿易任務担当の一代官がいるのは勿論である。その他、隣国との交際という点からすると、通詞ほど重要な役人はいないであろう。人によっては言葉さえよく通じれば済むと考えているけれども、全くそうではない。人柄が良く才覚があり、義理を弁え、主君やその命による仕事を大切にする者でなければ、本当の意味でこの務めを果たせる通詞とは言えず…。[29]

(4)…、とかく日本の道理と朝鮮国の道理は相当異なるので、学問・才智に優れた人材を擁さなければ、如何に意を尽くそうとも隣国との外交がうまくいく筋道も立ちようが無かろう。〔よって、〕学力のある者の登用は、極めて重要なことである。[30]

つまり、芳洲が養成しようとしていた通詞とは、ただ韓語のみに長けた者ではなく、語学はもとより学問や才智、更に君主や任務への誠意、朝鮮国の道理への理解力を有する人材であった[31]。むしろ、語学の教科書の底本であるにも関わらず、本来は儒教道徳教訓書であるはずの『全一道人』を底本に選んでそのカリキュラムの第三段階に据えることで、語学能力しか持たない通詞にならないようにし、人格面でも学問面でも誠信外交の場で職務を果たすに値する者として養成する目的があったと解釈できる。

したがって、芳洲の養おうとした「其心」には、語学にとどまらず儒教道徳や朝鮮国の道理などへの深い理解力が含まれていた。そして、「其心」を養うことで心身とも誠信外交の場で

28) 「またいかやうにかきてもおなしことなりといへることあり くわしく韓人にまなひ ひろく たつねてはしめてしるへし たとへは 全一道人を はしめかなにてかきたるを熟讀して能覚て後 かさねて諺文にてかける■■を以てくわしく韓人にならふへし さなくはまことの韓語とはなるまし」、安田(1964)、p.八〇。なお、欠字の個数は未詳。

29) 「朝鮮に相務め候御役人、館守・裁判・一代官は勿論の事に候。その外には隣交の義に付き、通詞より切要なる役人はこれなく候。人により候ては言語さえよく通じ候らえば相済み候と存じ候らえども、聊か以てさようにてはこれなく候。人柄もよろしく、才覚これあり、義理を弁え、上の事を大切に存じ候者にてこれなく候ては、誠の御用に立ち候通詞とは申しがたく、…」、田代校注(2014)、p.43.

30) 「…、とかく御国の義他方とは甚だ違い候事にて、学問・才力の勝れ候人を御持ちなされず候ては、いか程上に心を御尽しなされ候ても御隣好の筋立ちがたくこれあるべしと存じ候。学力これある人を御取り立てなされ候義、切要の御事に御座候。」、田代校注(2014)、p.112.

31) 芳洲の構想した通詞のありようについては、別稿で既に検証している。金子(2018)を参照されたい。

www.kci.go.kr

職務を誠実に遂行する通詞へと育てることが『全一道人』の教育観であったと考えられよう。

3.2. 芳洲の眼前にある二つの孝

続いて、『全一道人』によって「其心をやしな」われると想定された者たちの持つ問題に目を転じたい。前節が儒教道徳発信者についての検証だとすれば、本節は逆に受信者側の検証ということになる。

儒者であった芳洲にとって『全一道人』の内容は馴染みのあるものであっても、韓語通詞となるための訓練を受けていた稽古生には必ずしもそうではなかった可能性が少なからず存在する。次章で詳述するように、『全一道人』は親子関係の徳行・悪行記事を集めた孝部と兄弟関係の徳行・悪行の事例を示す弟部の二部で構成され、そのうちの大部分を孝部が占めている。そこで示された孝の内容が日本人の考える孝と乖離しているのである。日本人の理解する孝がどのようなものであったかは、『本朝二十不孝』で井原西鶴[32]のした指摘が分かりやすいので、以下にこれを挙げる。

> (3)(A)雪中の笋、八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり。世に天性の外、祈らずとも、夫夫の家業をなし、禄を以て万物を調え、教を尽せる人、常也。(B)此常の人稀にして、悪人多し。生としいける輩、孝なる道をしらずんば、天の咎を遁るべからず。其例は、諸国見聞するに、不孝の輩、眼前に、其罪を顕はす。…。[33]

内容により、大きく二つに分けることができる。前半部に当たる(A)は孝行の実践方法、後半部の(B)は不孝者の多さとその末路、である。うち、韓国や中国との違いが如実に表れているのは(1)であろう。そこで、これを解釈するところから韓国・中国と日本との孝観念の違いを確認したい。

ここでいう「雪中の笋」と「鯉魚」が、孝行説話集『二十四孝』に収められた孟宗と王祥という二人の孝子、およびこの二人の孝行譚を指すことは、言を俟たない。発祥の地である中国はもちろん、ベトナム[34]含む東アジアで広く読まれていた。ただ、読まれていた

32) 生没年は1642(寛永19/仁祖20)年~1693(元禄06/粛宗19)年。江戸中期の詩人にして浮世草子作家。芳洲より26歳年上で、芳洲が対馬藩藩儒となった翌年に死去した。よって、芳洲が対馬へ行く前から西鶴の作品を目にすることは十分できたのではないかと推測される。

33) 麻生磯二・冨士昭雄共訳(1976)井原西鶴『本朝二十不孝』〔対訳西鶴全集10〕、明治書院、p.3、「序」。なお、合字や繰り返し記号は本来の字に戻し、漢字も新字体に改めた。以下同じ。(A)(B)の番号も引用者による。

34) 日本や韓国はいうまでもなく、ベトナムでも『二十四孝』は受容され、読まれていた。佐藤トゥイイェン(2017)『ベトナムにおける「二十四孝」の研究』、東方書店に詳しい。日本や韓国については徳田進(1963)『孝子説話集の研究-二十四孝を中心に』(中世篇・近世篇・近代篇)、井上書房を参照。

www.kci.go.kr

事実は同様であっても、受容のあり方は異なっていたようである。

二つの孝行譚を簡単に紹介すると次のとおり。まず「雪中の笋」とは、孟宗竹の名の由来でもある孟宗が、冬間近のころに生えるはずのない筍を重病の老母が食べたいと臨んだので竹林に入って悲嘆に暮れていると、筍が数本生えてきたので持ち帰って供したという内容。次の「鯉魚」とは、幼くして実母を亡くした王祥という男の話で、日頃から辛く当たる継母が罹病して魚を食べたくなったため、服を脱いで凍りついた水面を割ろうとすると忽ち溶けて鯉が躍り出たので持ち帰って供したというものである。

両孝行譚はどちらも「寒い時期に得るのが本来至難または不可能な食べ物を冬に求められるという状況に主人公が陥るも、それが超自然的現象によって解決する」というストーリーを持つという点で共通する。この超自然的現象の発生を、主人公の孝心によって天が感動して発生させたものと解釈し、孝感と称する。韓国では、どちらも世宗代に刊行された初版の『三綱行実図』に掲載され、孝行の実践事例として朝鮮国内で長らく扱われた35)。ところが日本では、上で「雪中の笋、八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生舩にあり」というように、読まれはしても所詮は物語であり、現実的な内容としては理解されていない。それどころか、主人公二人の行動は徳行として模範視されているのではなく、行う必要の無い奇行と見なされている。雪中にタケノコを求めるなら八百屋に行け、鯉なら魚屋の生け簀にあるぞと西鶴が述べる所以である。

では、日本において孝はどのように認識されていたのか。天を感動させて奇跡を起こすようなものではなく、現実社会の中で家業に励み、十分に俸禄を得て親を奉養することこそが常道だと、西鶴は言う36)。

このような現実的な理解はひとり西鶴のみではない。少し時代は下るけれども、幕府もまた同様であった。江戸幕府が1801(寛政13・享和01/純祖01)年に刊行した『官刻孝義録』

35) 実際に現実的な内容として理解されていたと言っているのではない。ただ、道徳行為を推奨するための官撰教化書の記事として採択され続けてきた点は事実であり、これを指摘しているのである。

36) 西鶴のこの指摘が、孟宗と王祥の孝行譚が既に広く受け入れられているからこその皮肉であることは否定できない。しかし、もしその受け入れ方が超自然的現象を実現可能なものとするものであれば、果たしてこの指摘が諧謔として読者の笑いを誘えたのか、疑問である。逆に、窮まった者への最後の救済が否定されたものとして怒りを買いはしないだろうか。発信者の皮肉が諧謔として笑いを得るためには、皮肉られる対象への理解が受信者にも発信者と同程度に求められよう。この指摘の場合、読者たる近世日本人と西鶴の双方が、孝感という超自然的現象を「そもそも起こりようのない、非現実の現象」と見る共通認識を有するからこそ、笑いを呼べるわけである。後述される日本の『官刻孝義録』と朝鮮国の行実図系教化書はいずれも官撰で、比率は異なるものの、ともに現実の徳行表彰事例が収録されている。しかし、孝感については、前者には記述が全く無く、後者は随所に見られる。現実での徳行実践を教化する目的で作られた官撰教化書という政策メディアにおける孝感記述の有無は、孝感なるものがどのように理解され受け入れられていたかを示す一端であると言えよう。

www.kci.go.kr

もそうである。同書は、寛政の改革の一環として、儒官の柴野栗山に勧められた松平定信が、林大学頭をはじめ学問所の関係者に命じて作らせた徳行事例集である[37]。飛騨を除く日本全国[38]から、そして1602(慶長07/宣祖35)年[39]から1789(寛政10/正祖22)年頃[40]までの、韓国でいう概ね朝鮮時代後期全般にわたる、様々な徳行[41]の実践事例が収録されている。『官刻孝義録』で読むことのできる孝行にも孝感を記録したものは無い。「葬儀を行う」「家の生計を維持する」「親を扶養する」といった、現実的なものばかりである[42]。つまり、あくまでも勤労によって孝を為すというのが日本における孝であった[43]。

この違いは、弟(悌)の徳行についても同様である。『全一道人』では弟徳の悪行者が新築の家舎を天帝の命で起きた大風雨で壊されたり[44]、突然死して奇形の牛として転生したのち一年で再び死ぬ[45]といった、孝感のマイナス現象とも言える天罰の発生する事例が載せられる[46]。これに対応する徳目は、『官刻孝義録』では「兄弟睦」という品目が相当するけれども、現実的な徳行で占められている。

以上のように、「孝」といい「弟」といい、儒教の徳目の名を冠する道徳ではあってもその実践行為の次元において日本と『全一道人』およびその底本たる『勧懲故事』とでは大きな差が存在したのであった。そしてこの差は、この違いを理解し受容できる知性の涵養こそが芳洲の言う「其心をやしな」うことではなかったかと考えられる。

4. 韓語通詞養成用教材としての『全一道人』の適性

前章で見たとおり、『全一道人』を用いた教育によって誠信外交にふさわしい有徳の韓

37) 菅野則子校訂(1999a)『官刻孝義録』下巻、東京堂出版、p494.
38) 飛騨の事例が採録されていない理由は未詳。菅野則子(1999b)、p.4.
39) 菅野校訂(1999a)下巻、p.499.
40) 菅野校訂(1999a)下巻、p.495.
41) 全11種。後述。
42) 鈴木理恵(2005)「江戸時代における孝行の具体相-『官刻孝義録』の分析」、『長崎大学教育学部社会科学論叢』66、長崎大学、p.27.
43) この他、断指や割股といった行為も、日本では受容されなかった。これは、親の気に因ってできあがった自身の肉体を供することで罹病した親の気を補うという考え方に基づく孝行である。これが受け入れられなかった背景には、気に関する理解の違いが考えられよう。
44) 『全一道人』および『勧懲故事』の弟部「恃富輕弟」。
45) 『全一道人』および『勧懲故事』の弟部「欺繼父弟」。
46) 孝に比べると、弟徳譚は超自然的現象が少ない。特に、『全一道人』と共有される弟徳譚に天感や天罰は見られない。

www.kci.go.kr

語通詞を育てようとしたこと、そしてそのために日本の孝弟と儒教の孝弟との違い、とくに孝の違いを理解させようとしたのではないかと考察した。本章では、この目的を達成するのに『全一道人』が「其心をやしな」うためのどのような適性を見出されたのかという観点から、同書を分析したい。

4.1. 『全一道人』『勧懲故事』と行実図系教化書

芳洲が韓語通詞養成カリキュラムのための教科書の底本に明の『勧懲故事』を選んだことについて疑義を呈してきた。その最大の理由は、朝鮮国の官撰教化書、行実図系教化書の存在ゆえである。同じく儒教道徳をテーマとし、人物伝型の体裁を取り、しかも既に韓語ネイティブによって諺解文が付されているこのシリーズを用いれば、「其心をやしな」うことは十分に可能であろう。そこで、これらを比較し違いを把握したい。

【日】『全一道人』雨森芳洲(1668-1755)編、徳：孝弟・有不徳行対照
【明】『勧懲故事』汪廷訥(1573-1619)編、徳：孝弟忠信礼儀廉恥・有不徳行対照
【朝】刪定『三綱行実図』偰循(????-1435)編、徳：忠孝烈・徳行のみ
【朝】増補『続三綱行実図』申用漑(1454-1529)編、徳：忠孝烈・徳行のみ
【朝】『二倫行実図』曺伸(1454-1529)編、徳：序信・徳行のみ

『全一道人』は、その凡例によると1729(享保14/英祖05)年に完成。手筆本であり、刊行はされなかった。芳洲によってカタカナ表記のハングルとその和訳であるひらがな漢字混じり文が書かれる。漢文や絵図は無い。底本が『勧懲故事』であることは再三言及したけれども、より正確に言えば、『勧懲故事』の巻1「孝部」と巻2「弟部」だけを内容とする。それゆえ、徳目が孝と弟(悌)の2種しかない。しかし、両部とも徳行と悪行とが対を成す構成となっている。すなわち、孝部では孝と不孝の記事が、弟部では弟と不弟の記事が、それぞれ交互に読まれるわけである。徳行と悪行を別個に数えればその行動の種類は4種と言えなくもない。記事はいずれも中国の伝資料を由来とする。

『勧懲故事』は、明国の汪廷訥の編。万暦年間の人である。刊年は、現存する和刻本に明記されないものの、万暦35年つまり1607(慶長12/宣祖40)年以降との指摘がある[47]。上述のとおり『全一道人』の底本なので、基本的な特徴は変わらない。和刻本に

47) 林桂如(2017)「汪廷訥《勧懲故事》之成書及其東傳影響之研究」、『東華漢学』25、東華大学中国語文学系、台湾、p.138.

www.kci.go.kr

拠れば、絵図を伴い、本文は漢文のみ。孝弟だけでなく忠信礼儀廉恥も含めた全8徳目の記事を収める。しかもそれぞれの徳目に徳行記事と悪行記事が交互に挙げられるため、実質全16種もの多様な内容を有する。各記事は、史書や『小学』・勧善書・『列女伝』など幅広い範囲の資料から取られた48)。いずれも中国人を主役とする。これは『全一道人』も違わない。

残る三つは全て朝鮮王朝政権によって刊行された、行実図と呼ばれる一連の民衆教化書のうち、『全一道人』と共有された人物伝を含み、且つ重刊されて朝鮮国で長らく読まれたと考えられるものである。なお、『五倫行実図』は芳洲の死後に刊行された、つまり芳洲が目にすることのできなかったものであるため、除外した。この3冊を略述すると以下のとおりである。

まず、刪定『三綱行実図』(以下、『三綱』)は、1434(永享06/世宗16)年に世宗が刊行した初版『三綱行実図』の中から忠孝烈各35事例、合計105事例を抜粋し、これに諺解文を付して成宗が1490(延徳02/成宗21)年に刊行させたもの。中国人を主役とする記事が多いものの、新羅等韓国の事例も全体の15%に相当する14例を収める。次に、増補『続三綱行実図』(以下、『続三綱』)は、『三綱』の続編として中宗が1514(永正11/中宗09)年に刊行された初版『続三綱行実図』を、宣祖の命により忠臣図1例の増補と諺解文の改訳が施されて1579(天正07/宣祖12)年に刊行された行実図で、『三綱』に比べ韓国事例が多く、約80%を占める。最後に、『二倫行実図』(以下、『二倫』)は、同じく中宗代に当たる1518(永正15/宣祖12)年に刊行された。儒教道徳のいわゆる五倫のうち三綱を除く二徳、すなわち「長幼の序」と「朋友の信」をテーマとし、これらをまとめて二倫と称す。ただし、序と信はそれぞれ兄弟・宗族、朋友。師生(師弟)に細分されるので、扱われる人間関係としては4種類になる。朝鮮王朝が刊行したにも刊行したにも関わらず、全てが中国事例である。これらの行実図には三つの点で共通する。第一に、専ら徳行つまり模範行為事例のみを収録していること。第二に、本文である漢文とその諺解文を有し、絵図を伴うこと。最後に、いずれもそれぞれの初刊年こそ異なるものの、その後も朝鮮時代を通して多く重刊されていること49)、である。

以上、『全一道人』と『勧懲故事』、そして三種の行実図を概観した。徳目の数も去ることながら、反例を収めるかどうかという点が最も大きな違いであると思われる。ただ、前二者の半分を占める反例を除き徳行に限定して考えれば、全17事例中の8例、つまり『全一道人』の約半分が何らかの行実図において見られる道徳譚だということになる。同

48) 林桂如(2017)、p.139.
49) 志部昭平(1990)『諺解三綱行実図研究』全2冊、汲古書院、pp470-472、注(18)を参照。

www.kci.go.kr

書と行實図系教化書との間にある道德譚の正確な重複關係については拙稿50)で整理してあるので本稿では要約するにとどめるけれども、この狀況が彼の小倉進平をして「〔引用者補足：『全一道人』孝部第一話「大孝感親」の冒頭文を引き〕此の話の材料が朝鮮の「三綱行実」又は「五倫行実」等に出て居るといふことは、大いに興味ある事柄」51)と、そして後に小倉(1964)で「『全一道人』を「「三綱行実」或は「五倫行実」などの朝鮮文に日本文の対訳を附したもの」」(p.59)と言わしめたと見て良さそうである。

4.2. 韓語通詞養成用教材としての適性

ここで節を改め、『全一道人』(及びその底本の『勧懲故事』)と行実図系教化書とを比較し、前者に見出される韓語通詞養成用教材としての適性を検証する。そこでまず、芳洲が後者を選ばなかった理由を考察するために、芳洲の朝鮮国滞在歴を整理したい。

芳洲が朝鮮国滞在中に行実図系教化書を目にする機会があったのかどうか、残念ながらそれを明らかにする資料は現時点で確認されていない。翻って芳洲の朝鮮国滞在歴を見ると、1703(元禄16/粛宗29)年～1705(宝永02/粛宗31)年、1709(宝永06/粛宗35)年、1729(享保14/英祖05)年と複数回に及ぶことから、朝鮮の書物に触れる機会は多かったものと思われる。例えば、李睟光52)の『芝峰類説』は実際に読んでいる53)。また、諺文で書かれた『淑香伝』『李白瓊伝』を書き写してハングルを覚えたという指摘もある54)。そして、最初の2年間の滞在は韓語学習のためのものだったので、諺解文の記載された行実図を目にする機会は充分あっただろう。行実図は、既に述べたとおり朝鮮王朝が編纂・刊行した民衆教化書で、中国だけでなく韓国の徳行実践者の記事も収録しているうえ、朝鮮八道に広く普及していた。しかも漢文と諺解文を備えることから、芳洲自身の韓語学習にも

50) 金子祐樹(2015)「『全一道人』と『五倫行実図』の比較研究に向けて―その諺解文分析のための資料検証：行実図系教化書との比較による『全一道人』の翻訳論的研究(1)~(2)」、『韓国日語日文学会2015年冬季国際学術大会発表論文集』、韓国日語日文学会、p.212.【表】を参照。

51) 小倉進平(1920)『国語及朝鮮語のため』、ウツボヤ書籍店、pp.137-138.

52) 生没年は1563(永禄06/明宗18)~1628(寛永05/仁祖06)。全州李氏、号は芝峰。その著に『芝峰集』『芝峰類説』がある。文禄慶長の役を実際に経験した世代であり、『芝峰類説』には同戦争に関する記録も見られる。

53) 芳洲の随筆集『たはれ草』には、『芝峰類説』から得た知識を以て言及した部分がある(水田紀久k校注[2000]雨森芳洲『たはれ草』、『仁斎日記・たはれ草・不尽言・無可有郷』〔新日本古典文学大系99〕所収、岩波書店、pp.115-116.)。

54) 上垣外憲一[1989]『雨森芳洲-元禄享保の国際人』〔中公新書945〕、中央公論社(現、中央公論新社)、pp.94-95.

www.kci.go.kr

役立つという条件を満たしている。にも拘わらず、芳洲は『勧懲故事』から孝部と弟部だけを抜き出し、これらを底本に自ら諺解文と和訳文を作って「其心をやしな」う韓語通詞養成用教材として構想したわけである。

したがって、「其心をやしな」うということが、朝鮮国とその使節をはじめとする人々を理解する心を養うということだとすれば、『全一道人』はそもそも矛盾を抱えながら作られた教材だと言う他ない。この矛盾を昇華する一つの解釈として、芳洲の抱く朝鮮国認識の限界を指摘することは可能である。芳洲は、上述のとおり倭館滞在や韓語学習を通して韓語や韓人に対する理解を相当程度深めていたものの、中国の風習を書物で理解していれば朝鮮の風習も十中八九は推察できるものという認識も有していた55)。この認識により、韓語通詞を育てるために明の書物でも構わないと考える可能性は存在しよう。とはいえ、芳洲の韓国理解の深さを考慮すると、この可能性にのみ答えを求めるのも早計ではないかと思われるのである。

そこで注目すべきは、『全一道人』・『勧懲故事』と、行実図系教化書との、書物総体としての内容の違いである。

まず、徳目数について。芳洲は確かに『勧懲故事』を底本にしたものの、その全てではなく、孝部と弟部の二部にとどめた。徳目を限定するという『全一道人』のこの特徴は、底本よりも行実図に近い56)。孝弟の二つに限定した理由について、儒教道徳における孝の位置づけは言うまでもなく、そのうえで、「孝弟也者、其為仁之本与」57)という『論語』の文言と関係があるのではないかという指摘をひとまずしておく。ともあれ、当時の朝鮮王朝治世の社会において読まれた人物伝型民衆教化書の代表は、忠孝烈の三綱、または序信の二倫をテーマとする行実図だったのであり、『全一道人』がこの形式に適合し、かつ三綱と二倫からそれぞれ1つずつ徳目を取った構成になっているという点は示唆的であろう。

次に、各徳目の構成が孝と不孝というように徳行と悪行とを交互に示すものとなっている点について。結論から言えば、これは日本人である韓語通詞稽古生の読みやすい内容を考慮した結果と考える。『全一道人』以前に日本国内で刊行された教訓書としては、浅井了

55)　「朝鮮は専ら中華を学び候風義に候故、書物の上にて得と唐の風義を合点いたし候らえば、十に八、九迄は朝鮮の風義も推して知れ申す事に候。」(田代校注(2014)、pp.51-52.)

56)　芳洲の生存時において、行実図は三綱または二倫のいずれかのみをテーマとする官撰教化書だったのであり、したがい、多くの徳目を網羅する『勧懲故事』とは逆に徳目を限定する傾向を有していたと言える。

57)　『論語』「学而第一」。なお、解釈については主に朱子以前の「孝弟なるものは、それ仁の本たるか」、つまり孝弟を仁の根本とするか、或いは朱子による「孝弟なるものは、それ仁を爲すの本か」として孝弟を仁を実践する根本とするかの二つがある。朝鮮王朝による儒教の国教化が朱子学によるものだったことを踏まえると『全一道人』の孝は後者ではないかと推量されるけれども、ここでは問題の指摘にとどめる。

www.kci.go.kr

意[58]によって1630(寛永07/仁祖08)年に和刻本『三綱』を、1661(万治04・寛文01/顕宗02)年に和訳本『三綱』が刊行された。そして、やはり了意によって1665(寛文05/顕宗06)年には日本の徳行事例を集めた『大倭二十四孝』が、次いで藤井懶斎[59]の『本朝孝子伝』と、上で挙げた西鶴の『本朝二十不孝』が1686(貞享03/粛宗12)年に世に出る。したがって、『全一道人』以前において既に有徳不徳の対照を等しく受け入れ楽しむ文学的土壌ができあがっていた[60]。この「楽しむ」という点が重要である。『勧懲故事』の作者、汪廷訥は戯曲も書き、彼もまた読者とともに悪行話に興味があったのではないかとの指摘もある[61]。一方、日本でも西鶴は勿論、後代の『官刻孝義録』すら記事本文は大田南畝[62]が書いた。徳行一辺倒の行実図よりも、有徳不徳を織り交ぜた『勧懲故事』を底本とするほうが通詞稽古生たちにとって受け入れやすいと判断したのではないかと考えられる。

5. おわりに

以上、駆け足ながら『全一道人』の韓語通詞養成用教材としての適性を検証した。

芳洲の韓語通詞養成カリキュラムにおける『全一道人』の役割は「其心をやしな」うことである。そして、『大学章句』における「心」と「誠」への注釈と芳洲の「誠信と申し候は実意と申す事」との対応から、芳洲の目的が、儒教道徳を熟知させることで、身を正された、誠信外交にふさわしい韓語通詞の養成にあったのではと指摘した。そして中国の道徳譚に描かれる孝弟の実践と、日本で観念されている現実的な孝弟との違いを理解し受容させることが、芳洲にとっての「其心をやしな」うことであった。書物で中国のことを学んでいれば朝鮮国のことも十中八九は分かると考えていた以上、芳洲の朝鮮観に限界があった点は否めないものの、そのような朝鮮観を以てしても、孝弟認識を始めとした日本と朝鮮との間の差異は通詞たちの力で乗り越えるべきものと見られていたと言えよう。

さらに、『全一道人』および『勧懲故事』と、行実図系教化書との違いを、書物総

58) 生年未詳、1691(元禄04/粛宗17)。僧侶にして仮名草紙作家。本稿で取り上げた『三綱行実図』の和刻と和訳だけでなく、中国の怪異小説「剪燈新話」などの翻案もしている。

59) 生没年は1628(寛永05/仁祖06)-1709(宝永06/粛宗35)。江戸前期の儒者で山崎闇斎の弟子。

60) 一方、朝鮮時代において徳行でない事例は野談や野史といった書物に見られる。行実図は官撰教化書であり、「官撰」と「野」の違いは自ずと明らかであろう。

61) 湯城吉信(1996)「類書蒙求類について」、加地信行研究代表(1996)『類書の総合的研究』(平成六・七年度科学研究費補助金研究成果報告書：総合研究 (A)、課題番号06301002)、p.170.

62) 生没年は1749(寛延02/英祖25)~1823(文政06/純祖23)年。文人・狂歌師として有名なばかりでなく、祐筆としての職も持っていた。

www.kci.go.kr

体として比較した結果分かったのは、『全一道人』が韓語通詞稽古生に受け入れられやすい有徳不徳交互の構成を持つ『勧懲故事』を底本としつつも、『三綱』『続三綱』の孝と『二倫』の弟という両書の代表的な徳目だけをテーマとしていたことである。徳行一辺倒よりも面白みを感じやすい有徳不徳の構成を『勧懲故事』から取りつつ、徳目は朝鮮国の行実図に寄せたのが『全一道人』ではなかったか、と結論付けることができる。教材としての適性を備えさせようとした芳洲の着想が垣間見られよう。

最後に、なぜこのような工夫が必要であったかについて、瞥見を加えたい。

儒教の礼式に造詣の深い三使をはじめ朝鮮国の人々と対するには、儒教道徳にもとづく行動様式をよく知る韓語通詞の存在が必要と芳洲は考えた。しかし、日本では儒教の徳行を非現実的と見る考えが既にあり、これを以て儒教の徳行を学ぶ朝鮮の人々と接するには徳行をただのお話しとして理解させるわけにはいかなかった。そこでこれを打破するため、有徳不徳の行為を対比的に示す『勧懲故事』を底本に選んだのである。つまり、その背景には、儒教の徳行を架空のものとしてしか受け取れない日本人の儒教徳行観が存在したと考えられる。芳洲の生きたこの時代において、日本と韓国とは儒教道徳において、既に小さからぬ、そして互いの交流の為に相互理解すべき、文化差があったということである。

【参考文献】

《韓国語》

金子祐樹(2009)「행실도계(行実図系) 교화서(教化書)의 전개와 충행위(忠行為)의 추이 - 17세기 초기의 관찬(官撰) 교화서 『동국신속삼강행실도(東国新続三綱行実図)』의 분석을 통해 -」、『民族文化研究』51、高麗大学校民族文化研究院、pp.525-578.

許仁寧(2017)「아메노모리 호슈(雨森芳洲)의 『전일도인(全一道人)』 번역에 대하여」、『2017년 민족어문학회 정기학술대회 발표논문집- 한국어문학과 이중 언어 · 문자의 문제』、민족어문학회、pp.327-341.

《日本語》

麻生磯二 · 冨士昭雄共訳(1976)井原西鶴『本朝二十不孝』〔対訳西鶴全集10〕、明治書院

遠藤光曉 · 伊藤英人 · 鄭丞恵 · 竹越孝 · 更科慎一 · 朴真完 · 曲曉雲編(2009)『訳学書文献目録』、도서출판 박문사

小倉進平(1920)『国語及朝鮮語のため』、ウツボヤ書籍店。国立国会図書館デジタルコレクション、http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/926011/110（検索日：2019年4月10日）

_____(1940)『増訂朝鮮語学史』刀江書院.。のち、小倉進平著 · 河野六郎補注(1964)『増訂補注朝鮮語学史』、刀江書店。さらに後者が1986年に西田書店から復刻。

金子祐樹(2015)「『全一道人』と『五倫行実図』の比較研究に向けて—その諺解文分析のための資料検証：行実図系教化書との比較による『全一道人』の翻訳論的研究(1)～(2)」、

www.kci.go.kr

『韓国日語日文学会2015年冬季国際学術大会発表論文集』、韓国日語日文学会、pp.210-214.
_____(2018a)「雨森芳洲の見た通詞と朝鮮国―『たはれくさ』と『交隣提醒』から一考した『全一道人』編纂の動機と意図―」、『2018異文化交流国際学術研討会論文集』、南栄科技大学生活応用学院、pp.44-55.
_____(2018b)「雨森芳洲『全一道人』に関する一考察―江戸時代の日本人に向けた異文化理解教材としての内容検証：「孝」を基軸に―」、『韓国日本文化学会第55回国際学術大会発表論文集』、韓国日本文化学会、pp.143-147.
上垣外憲一(1989)『雨森芳洲-元禄享保の国際人』〔中公新書945〕、中央公論社(現、中央公論新社)
姜在彦訳注(1974)『海游録-朝鮮通信使の日本紀行』[平凡社東洋文庫252]、平凡社
神田喜一郎(1949)「朝鮮と雨森芳洲」、『世界人』1巻7号、世界人社、pp.48-52.
佐藤仁訳(1996)『朱子学の基礎用語 -北渓字義訳解』〔研文選書64〕、研文出版
佐藤トゥイイェン(2017)『ベトナムにおける「二十四孝」の研究』、東方書店
志部昭平(1990)『諺解三綱行実図研究』全2冊、汲古書院
菅野則子校訂(1999a)『官刻孝義録』全3巻、東京堂出版
_____(1999b)『江戸時代の孝行者-「孝義録」の世界』〔歴史文化ライブラリー73〕、吉川弘文館
鈴木理恵(2005)「江戸時代における孝行の具体相-『官刻孝義録』の分析」、『長崎大学教育学部社会科学論叢』66、長崎大学、pp.25-39.
世宗大王紀念事業会編(1972)『三綱行実図』、世宗大王紀念事業会
田代和生校注(2014)『交隣提醒』[平凡社東洋文庫852]、平凡社
中村幸彦校注(1975)『百姓分量記』、p.246.　本稿では同(1996)『近世町人思想』〔日本思想大系新装版〕、岩波書店
朴珍奇(2017)「日本における韓国語教育に関する研究-大学の韓国語学習者調査に見る現状と課題」、『岡山県立大学教育研究紀要』第1巻1号、岡山県立大学大学教育開発センター、pp.21-31.（DOI:http://dx.doi.org/10.15009/00002187）
水田紀久校注(2000)雨森芳洲『たはれ草』、『仁斎日記・たはれ草・不尽言・無可有郷』〔新日本古典文学大系99〕、岩波書店、pp.37-134.
持田祐美子(2015)「日本人観光客の口コミから見る日韓謝罪文化の比較-ミスに対して「謝罪がなかった」事例から」、『日本言語文化』33、pp31-45.
(DOI:http://dx.doi.org/10.17314/jjlc.2015..33.002)
安田章(1964)『全一道人の研究』、京都大学国文学会
湯城吉信(1996)「類書蒙求類について」、加地信行研究代表(1996)『類書の総合的研究』(平成六・七年度科学研究費補助金研究成果報告書：総合研究（A)、課題番号06301002)、pp.163-174.

《中国語》
林桂如(2017)「汪廷訥《勧懲故事》之成書及其東伝影響之研究」、『東華漢学』25、東華大学中国語文学系、pp.133-161.

논문 투고 일자：2019. 04. 14.
논문 심사 일자：2019. 05. 03.
게재 확정 일자：2019. 05. 07.

www.kci.go.kr

<要旨>

異文化理解教材としての『全一道人』小考
—韓語通詞養成用教材としてのその適性—

金子祐樹

本稿は、雨森芳洲(1668-1755)が著した韓語通詞養成用教材『全一道人』について、その適性がどのようなものであったかを考察するものである。この目的のために検証したのは、(1)「其心をやしな」うことの具体的意味、(2)同書の総体としての内容、の二点であった。検証の結果、明らかになったことは以下のとおりである。

「其心をやしな」うとは、儒教道徳を熟知させることで、身を正された、誠信外交にふさわしい韓語通詞を養成すること。そしてそのために、中国文献上の儒教道徳の内容と日本で認識されている内容との違いを理解し受容させる必要がある。この目的で作られたのが『全一道人』であった。

朝鮮国の行実図系教化書でなく明の『勧懲故事』を底本に教科書を作ったのは、好例と悪例を交互に示すことで、稽古生らに面白く読ませるためである。そしてこのことは、日本と韓国において儒教道徳文化の理解に大きな違いが生じていることを示すものであった。

A study of *"Zen-itsu Dojin"* as a Textbook for Cross Cultural Understanding
—Examining Educational Material Aptitude for training Official Korean-Japanese Interpreters in Tsushima Domain—

Kaneko, Yuki

This study examined the aptitude of educational material in *"Zen-itsu Dojin"*, written by AMENOMORI, Hoshu. We analyzed two aspects: the concrete meaning of "Cultivate the Mind (「其心をやしな」う)", and the holistic contents of *"Zen-itsu Dojin"*.

The results are as follows.

The concrete meaning of "Cultivate the Mind (「其心をやしな」う)" is training officers for Korean-Japanese translation by familiarizing them with Confucian morals; they must understand the difference in contents of Confucian morals in Chinese books and the Japanese people's comprehension; *"Zen-itsu Dojin"* was written for this purpose.

The reason for selecting *"Quan cheng gushi*(勧懲故事*)"*, created during Ming dynasty, as the source book of *"Zen-itsu Dojin"*, and not *"Haengshil-do"* series of book for indoctrination(行実図系教化書), created during Joseon Dynasty, was to capture students' interest. This evinces that Korea and Japan differ greatly in the cultural dimension regarding Confucianism.

www.kci.go.kr